

11.14 世界糖尿病デー：CDEJとして…群馬からの一歩

前橋赤十字病院看護部 高木あけみ

現在、世界の成人人口の約5～6%にあたる2億4600万人が糖尿病を発症しています。2025年には3億8000万人(2007年より64.7%増)に達すると予想され、世界のどこかで10秒に1人が糖尿病に関連する病で命を奪われ、10秒に2人が糖尿病になっています。このような世界的規模の拡大・脅威となった糖尿病に対し、各地での予防や治療・療養の啓発活動を推進するため、IDF(国際糖尿病連合)の要請により2006年12月国際連合(国連)は11月14日を「世界糖尿病デー」に指定しました。1人のアメリカの女子大学生(1型糖尿病)クレア・ローゼンフェルドさんがきっかけとなりました。クレアさんは2004年(17歳)の夏にバングラディッシュなどを旅し、糖尿病に苦しむ人々の現状を日記にして出版しました。クレアさんは、招かれたIDFの会合で「すべての人が治療を受けられるように」と訴えました。IDFは、“Unite for Diabetes”(糖尿病に対して団結して立ち向かおう)というキャッチフレーズと、ブルーサークルのシンボルマークを採用しました。この(スカイ)ブルーは国連の旗の色であり青空を意味しています。世界の全ての国が手を取りあいつなぎあい、団結して大切な健康や生命を世界的流行のように広がりつつある糖尿病の脅威と闘うという多くの願いが込められています。そして11月14日は、インスリンの発見への功績で知られるフレデリック・バンティング博士の誕生日でもあります。

テーマは「上州から広げよう！ブルーサークル群青(ぐんじょう)、人情、そして友情」

群馬における「世界糖尿病デー」の取り組みを紹介します。11月8日に第28回関東甲信越糖尿病セミナー(前橋市民文化会館)を開催し、「人をつなぐ大きなブルーサークルの輪」を目指しています。日本糖尿病学会関東甲信越支部・日本糖尿病協会関東甲信越地方協議会を中心に、CDEも企画運営に加わっています。

めざす「人のサークル」として、様々な医療スタッフと参加者が昼休みの2時間を使って、糖尿病を学びながらの“だるまスタンプラリー”を企画しています。ブースは、CDEが中心となり①フットケア…足に触れながら一緒に見て、マッサージ(看護師)、②野菜の重量あてクイズ(管理栄養士)、③血糖あてクイズ(検査技師)、④インスリン展示・薬のクイズ(薬剤師)、⑤運動の実践(理学療法士・健康運動指導士)の5つから構成され、3つ以上体験すると「ブルーだるま」(このセミナーのために作成した世界糖尿病デーのカラーを用いたオリジナル)をプレゼントします。セミナー全体も、糖尿病に関連した小児から高齢者までの「人生のサークル」を通して、笑いや心とむ輪を広げる音楽も企画しました。CDEによる体験講座は今年で3年目になり、準備にあたり県内の各地から集合し必要な知識技術の研修会を行い、体験して学ぶ機会を提供しています。皆さんも一緒に、会場で大きなブルーサークルの輪を広げませんか？

CDEサークルを！

群馬では、CDEの会を2005年に群馬大学医学部保健学科教授(前「さかえ」編集長)の伴野先生のご尽力により発足しました。その活動として療養指導のための講習会(CDEJ受験希望者も含む)を年に7回、年1回の糖尿病セミナーでのCDEブース、研究発表会、各職種別研修会を行っています。母体である群馬メディカルスタッフの会である「グメスの会」の活動と合わせると、毎月(多い時は毎週)顔を合わせています。また、地域ごとにスーパーでの相談会や血糖測定など地域に根ざした活動も行っています。その結果、CDEJのネットワーク、人材育成、糖尿病の啓発活動は活発になってきています。今後、各医療機関や診療所などの機能に応じた診療体制ネットワーク構築が期待されるところです。

時折きれいに広がった青空を眺めると、この空のどこかで貧困や治療が受けられなく苦しんでいる小さな命や大切な命があると思うと悲しくなります。せめて、自分のできることを目の前にいる患者さんや地域の方々に提供できるように、CDEJの仲間とともに、小さな一歩を確実に踏み出していきたいと思います。世界糖尿病デーは、特別なことでなく毎日の意識や行動の積み重ねだと思います。